【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】（小学校用）

都道府県名	京　都　府

Ⅰ　学校の概要（平成 15 年４月現在）

学校名	京都府相楽郡山城町立棚倉小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	１	１	２	２	１	１	１	９	１５
児童数	２７	３９	４５	４７	３７	３９	２	２３６	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

伝え合う力を高め、心をつなぎ合える子どもの育成
－個に応じた指導の充実（国語科）－

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

実施学年：全学年　　教科：国語科

豊かな心を持ち、たくましく生きる児童を育成するためには、知識・理解はもとより、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などが必要であることと、国語はすべての学習の基礎であると捉え、国語力が生きてはたらく力となるよう、国語科を中心に、「伝え合う力」の育成に取り組むことにした。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

１　テーマ
伝え合う力を高め、心をつなぎ合える子どもの育成
（個に応じた指導方法の改善～少人数指導を中心にして～）

２　研究の見通し
児童の知的な意欲を高め、自ら学ぶ意欲の育成を図りながら、学習指導要領の目標に位置付けられている「伝え合う力を高める」ことに重点を置き、国語科の最も基本的な目標である表現力と理解力とを育成するとともに、一人一人が自分の思いや考えを適切に表現し、互いの立場や考えを尊重しながら言葉で伝え合う能力を育成していきたい。
伝え合う力を身につけるということは、言葉の生きた活用ができることであり、国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の基礎・基本の力を確実に習得し、それらを活用していくことである。
基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るには、個に応じた指導が必要であり、基礎・基本が身についてこそ個性を伸ばすことが可能であると考える。その中で、互いに個性を認め合う集団と、その集団の中での高め合いを考慮しながら、授業の創造をめざしていかなければならない。
また、少人数指導を中心に、「画一化・共通化教育」から、今、学校教育に求められている「個別化・個性化教育」に取り組んでいきたい。「習熟度の差」「学習速度の差」は当然一人一人違う。「もう少し時間をかければできるのに・・・」という児童に、どのように個別に指導するかということを考え、「指導の個別化」を図っていきたい。そして、「児童一人一人を大切にする」という基本的な考え方に立った上で、学習場面において「一人一人の児童の個性の伸長を図る」ような学習場面を構想し、「児童のこだわり」や「持ち味を生かすこと」、あるいは「児童の学びに即した課題追求」を重視することにより、自己教育力（自己学習力）を高めていくため、「学習の個性化」を実践研究し「個に応じた指導方法の改善」を行っていきたい。

3　研究の内容・方法
(1)　児童の実態・意識の把握
◇アンケートを実施し、児童の国語科に対する意識調査を行う。
◇基礎学力診断テストや、ＣＤＴの分析による実態把握
◇授業を通した実態把握
(2)　個に応じた指導方法の改善
◇個に応じ個を伸ばす少人数指導の工夫
（少人数加配教員を中心として）
◇指導体制の工夫改善
◇国語科の授業改善
・教材・教具の開発
－ワークシートの工夫、活用
－発展教材の工夫、開発
・子どもの実態を考慮した教材研究と授業改善
・意欲的・主体的に学習を進める学習活動の展開の研究
・確かな読みと適切な話し方ができるよう学習活動の中で位置付けた指導の展開
・理解を深め、思いを表現する音読の取組
(3)　読書喚起の取組
◇学校図書館の整備（学習情報センターとして）
◇読書センターとしての図書室づくり
◇積極的な読書活動の推進
(4)　先進校視察、講師招聘等による研修

平成16年度

1　テーマ
伝え合う力を高め、心をつなぎ合える子どもの育成
（個に応じた指導方法の改善～少人数指導を中心にして～）

2　研究の見通し
基本的に１年次と同様の研究内容・推進体制を継承しつつ研究を進めていきたい。
特に、「伝え合う力」の育成については、自分の思いや考えを適切に表現し、正しく理解するため、「話すこと・聞くこと」に関する基礎・基本の力の習得を目指して研究を進めてきた。国語の授業のみならず、各教科及び総合的な学習の時間をはじめ、さまざまな場面で実践を重ねてきた。
２年次は、国語科の最も基本的な目標である国語による表現力と理解力とを育成することに主眼を置き、「伝え合う力」を高めていきたいと考える。
そのため、国語科の授業において、文学的な文章・説明的な文章を中心に、読み取ったことをどのように伝えるのかについて考え、筆者の考えと自分の考えを対比させつつ、理由や意図を明らかにしながら話し合う活動に取り組んでいきたい。さらに、「伝え合う力」を育成するための各学年の年間計画を作成し、発達段階に応じて、「話すこと・聞くこと」にかかわる力を明らかにしていきたい。
また、各単元各時の評価規準を作成するとともに、少人数指導・習熟度別指導における評価について研究を進め、より一層、評価を生かした指導の充実（授業改善）を図りたい。
以上、基礎・基本の定着及び学力の充実・向上と教育活動全体を通じて行う豊かな心の育成が、テーマである「伝え合う力を高め、心をつなぎ合える子どもの育成」につながっていくものと考える。

3　研究の内容・方法
(1)　児童の実態・意識の把握
◇児童の国語科に対する意識調査を行う。（１年次との比較・分析）
◇基礎学力診断テストやＣＤＴの分析による実態把握
◇授業を通した実態把握

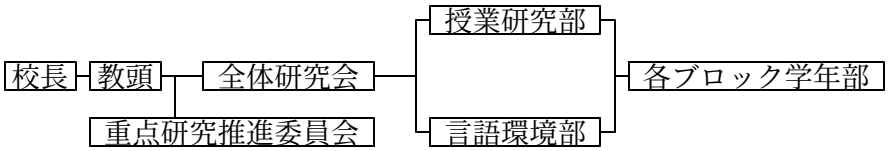
(2)　個に応じた指導方法の改善
◇個に応じ個を伸ばす少人数指導の工夫
・少人数グループ（習熟度別）の分け方について
・習熟度別コースを設定する際の基本にすべき内容について

・習熟度別コースの自己選択能力を育てるための指導について
◇低学年（１・２年）における個に応じた指導の研究
◇指導体制の工夫改善
◇国語科の授業改善
・教材・教具の開発
－ワークシートの工夫、活用
－発展教材の工夫、開発
・子どもの実態を考慮した教材研究と授業改善
・意欲的・主体的に学習を進める学習活動の展開の研究
・確かな読みと適切な話し方ができるよう学習活動の中で位置付けた指導の展開
・理解を深め、思いを表現する音読の取組

(3)　読書喚起の取組
◇学校図書館の整備（学習情報センターとして）
◇読書センターとしての図書室づくり
◇積極的な読書活動の推進

(4)　先進校視察、講師招聘等による研修

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題
１．研究の成果

１　児童の実態・意識の把握について
(1)　児童の国語科に対する意識調査を実施し、実態を踏まえた指導に見通しを持つことができた。
国語が好き：７１％
好きな領域：お話、漢字学習、言葉の学習
苦手な領域：発表、作文
(2)　観点別学力到達度診断テスト（ＣＤＴ）を実施し（６月、２～６年)、児童の学力実態を明らかにすることができた。
①　総合的に全学年全国平均をやや上回っている。
②　「言語事項」においては、全学年全国平均をやや上回っている。
③　「話す・聞く」「書く」が全国平均をやや下回っている学年がある。

２　個に応じた指導方法の改善
(1)　個に応じた指導方法の改善に取り組み、少人数指導（３～６年）において、習熟度別指導や興味・関心に応じた指導など様々な学習方法や学習形態を工夫することができた。
(2)　国語科の授業改善について
①　「伝え合う力」の育成に視点を当てて取り組み、学習活動が今までよりも幅広くなり、また独自の活動（習熟度別コースの編成など）も工夫することができた。
②　「話すこと・聞くこと」を中心に研究を進め、各学年の系統を明らかにするとともに、各単元各時間の具体の評価規準を決めることができた。
③　伝え合う場を位置づけることにより、様々な表現の方法を児童が選択できるようになり、意欲的な学習活動をすることができた。

３　読書喚起の取組
(1)　読書活動や調べる学習をする中で、図書室や町立図書館の活用を図ることができた。
(2)　図書室の蔵書の整備や読書センターとしての図書室づくり等に取り組み、積極的な読書活動を推進することができた。

(3)　各学級で「読書の木」を掲示し、各自勧めたい本の紹介ができた。

4　先進校視察、講師招聘等による研修
(1)　全教員（各学年担任及び加配）による先進校視察及び講師招聘による研修から、国語科における習熟度、評価規準及び少人数指導の在り方などについて理解を深めることができた。

6　その他
(1)　朝学習（始業前）により、基礎学力向上に向けての取組を全校的なものとし、定着を図ることができた。（２学期中は、定着を図るため職員朝礼はなし）
〔読書・音読・国語プリント・算数プリント〕
(2)　朝の会では、「１分間スピーチ」に取り組み、自分の考えを順序立てて話す力や正確に聞く力が高まった。
(3)　言語環境を整えるための取組を進めることができた。（漢字・ひらがなパズルの製作、各学年でゲストティーチャーによるブックトークを生かしたパネルの掲示など）
(4)　各学級で、スムーズな話し合い学習ができるよう、日常の会話の中から効果的な言葉を選び、「話し合いの約束」を決め、取り組むことができた。

２．今後の課題

1　国語科の授業改善について
「伝え合う力」の育成については、自分の思いや考えを適切に表現し、正しく理解するため、「話すこと・聞くこと」に関する基礎・基本の力の習得を目指して研究を進めてきた。国語の授業のみならず、各教科及び総合的な学習の時間をはじめ、さまざまな場面で実践を重ねてきたが、２年次は、国語科の最も基本的な目標である国語による表現力と理解力とを育成することに主眼を置き、「伝え合う力」を高めていきたいと考える。
そのため、国語科の授業において、文学的な文章・説明的な文章を中心に、読み取ったことをどのように伝えるのかについて考え、筆者の考えと自分の考えを対比させつつ、理由や意図を明らかにしながら話し合う活動に取り組んでいきたい。
さらに、「伝え合う力」を育成するための各学年の年間指導計画を作成し、発達段階に応じて、「話すこと・聞くこと」にかかわる力を明らかにしていきたい。
また、各単元各時の評価規準を作成するとともに、少人数指導・習熟度別指導における評価について研究を進め、より一層、評価を生かした指導の充実（授業改善）を図り、基礎・基本の定着及び学力の充実・向上につなげていきたいと考える。

2　言語環境の充実（言語活動の活性化に向けて）
国語のみならず、各教科各領域とも関連させ、各学年の実態に応じて具体的な言語活動を設定していきたい。（１年次での取組を踏まえつつ、読書活動の推進、本の紹介、読書発表会、絵手紙、調べる学習の報告など）

3　個に応じた指導方法の改善
少人数指導（３～６年）において、「少人数グループ（習熟度別）の編成の仕方」、「習熟度別コースを編成する際の基本にすべき内容」、また、「習熟度別コースの自己選択能力を育てるための指導」などについての研究をさらに進めなければならない。
また、低学年（１・２年）における個に応じた指導方法の在り方も、併せて研究していきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

1　（６月、２～６年）国語科の観点別学力到達度診断テスト（ＣＤＴ）を実施し、児童の学力実態を明らかにするとともに、結果を分析・考察し、授業改善及び課題克服の取組を進めた。

2　（２月、１～６年）国語科の観点別学力到達度診断テスト（ＣＤＴ）を実施し、その結果を６月時と比較・考察し、一人一人の実態を的確に把握するとともに、個に応じた指導の方策を探りたい。＜同時に算数科も実施＞

３　２年次も年度末には同様のＣＤＴ診断テストを行い、次年度への課題把握に努め、より一層一人一人の学力向上に努めたい。

４　（毎年４月、４年と６年）国語科及び算数科の京都府基礎学力診断テストを実施し、その結果を分析・考察し授業改善及び課題克服の取組を進めている。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１　研究会、説明会等の開催実績

(1)　公開授業（４年）

日時：平成 15 年５月 27 日（木）10:45 ～ 11:30
会場：山城町立棚倉小学校
対象：山城町内小中学校教諭等
目的：少人数・習熟度別指導の在り方を研究していくに当たり、その第一歩として町内小中学校に公開し、様々な意見や批評を得て、研究の一層の充実に資する。

(2)　山城地区学力向上推進協議会

主催：京都府山城教育局　山城地方学力向上対策会議
日時：平成 15 年 11 月 17 日（月）10:45 ～ 16:30
会場：①公開授業　３年・６年（山城町立棚倉小学校）
②全体会・分科会（宇治田原町文化センター）
対象：京都府山城教育局管内小中学校学力充実担当教諭等
目的：「京の子ども、夢・未来」プラン２１に基づく山城地方の小・中学校における学力の充実・向上の取組等を交流し、その一層の推進を図る。

※　全体会において、本校フロンティアティーチャーが、研究内容の成果と課題等について実践発表を行った。

※　本公開授業は、相楽郡小学校教育研究会の国語部及び山城町人権教育研究会学力充実部の授業研究会として位置づけられ実施された。

２　研究成果普及のためのＨＰ作成、パンフレット作成等の実績及び今後の予定

現在、本校のＨＰを作成中であり、研究内容のまとめ（１年次）とともに今年度中に公開予定である。

パンフレットは、「研究紀要」として、２年次 11 月に作成予定である。

３　フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績予定

各種研究会等に積極的に参加し、実践報告とともに研究内容の成果を広め、より一層の学力向上に努める。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　□ ６学級以下　☒ ７～１２学級　□ １３～１８学級　□ １９～２４学級　□ ２５学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　□ Ｔ．Ｔによる指導　□ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　☒ 国語　□ 社会　□ 算数　□ 理科　□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭　□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　□ 無